

仮想映像が 仮想映像を生む

豊洲の宵の落語会「都笑亭」第 115 回目の会は、特別出演として入船亭扇辰師匠においでいただいて社会人落語との共演の会。年に一度の特別企画として毎年 2 月に開いている「都笑亭スペシャル」。

社会人落語が三席続いた後、仲入りを挟んで入船亭扇辰師匠が登場。本日の出し物は「徂徠豆腐」。

50 分になろうとするような力が入った高座にすっかり魅了されたお客さん、終演後に目尻を拭いながら会場を出て行く人や「涙が出てしまった」と訴える人、アンケート用紙の感想欄に「涙が出ました」と書いて下さるお客様・・・・・・・・。

落語は高座で噺家が語っていく一人芝居のようなもの。噺家が語るドラマは、噺家の脳裏に現われる映像となって、その噺家だけの独立した世界を描きながら進んでいく。

そして噺家の仕草が客席の一人一人の目に入っていきのと同時に、音声で耳にも届けられる。そして受け取った客席の一人一人の脳に入っていった音声と映像は、一人一人の脳裏にスクリーンを広げていく。高座にいる噺家の脳裏のスクリーンに映る仮想映像が空間を移動して、観客の脳裏のスクリーンに別な仮想映像を描くことになる。「仮想映像が仮想映像を生む」、現代風に言えばバーチャルムービーとでも言おうか、落語とはそんな世界のように感じている。

噺家の心のありようと観客の心のありようは全く非同期であるにも関わらず、落語が示すストーリーを介してお互いが感動の領域に入りさえすればこのような世界を構成することができる。

不思議な、そして素晴らしい芸術であり、日本が世界に誇ることができる芸術であろう。

巷の人々のふれあいの機微を語る人情噺でこの関係が成立すると、観客席の人々は自分だけの仮想映像の世界の中に自分もすっぽりと埋まりきって、事の次第を肌で感じ取りながら噺を聞くことになる。

その結果、落語を聴いて涙を流すことにもなるのだろう。

高座の噺家が自ら感動の頂点に達していなければ、観客席の人々をこのような事態に追い込むことはできないだろう。

振り返って見ると・・・・・・・・、今までに涙を流したことがある落語を思い出して見る。

<子別れ>

大工の熊五郎は弔いの帰りに、土産に貰った強飯を手に持ったままで友人と一緒に吉原に上がる。

居残りを続けて四日後に家に帰ると・・・・・・・・。

謝罪と言訳をしているうちに女郎ののろけ話になり、共稼ぎのかみさんの逆鱗に触れ大げんかに発展。仲人の仲裁も甲斐無くかみさんは息子の亀吉を連れて家を出てしまう。熊五郎はこの女郎を連れ込んでしばらく暮らしたが、まともな暮らし方を知らない女郎とは間もなく破綻し、ひとりぼっちになってしまう。ここで、ようやく目覚めて真面目に働くようになったが。

ある日仕事に行く途中で息子の亀吉と出会い、これがきっかけとなり鰻屋の二階で夫婦の再会対面が実現する。そして夫婦はよりを戻して親子三人の暮らしが戻ってくる。

というドラマチックな噺は、「子は鎧 (かすがい)」という諺を引用した「落ち」で締めくくられる。

初代春風亭柳枝の作と言われており、時代としては幕末の作らしい。近頃では上中下の三部作または上下の二部作として分割することが多いようで、時には前半の筋書きを軽く説明しておいて、後半だけを語ることも多くなってきた。

一度だけ古今亭志ん生が通しで語る (志ん生は「突っ込みでやる」と表現していた) のを聞いたことがあるが、長時間にわたり、聞く方も大変だったが語る方はもっと大変だろうと思うような内容だった。熊五郎が吉原に上がって遊びまくる前篇 (「強飯の女郎買い」) をたっぷり聞かせることで、熊五郎の放蕩ぶりが聞き手の頭の中に詳細に描かれるので、後篇 (「子は鎧」) の反省した熊五郎が浮き上がるよう

にはっきりとして、元の鞘に戻る下りに迫力が出てくる。

母子家庭となって、手内職で息子を育てる母と息子（亀吉）との会話、街角でばったり出会った父子の会話、父母の再会の機会を演出する亀吉の存在、鰻屋の二階での夫婦の会話、いずれも真に迫るものがありグイグイと映像の中に引き込まれる。これも「強飯の女郎買い」があるからこそのものである。

後半の展開を盛り上げる亀吉の役割が大きく、亀吉がさりりと言うセリフが「落ち」となる。

面白おかしい場面が沢山あるので、そこで笑いを取ろうとして盛り上げ過ぎて噺の展開を台無しにする落語家も少なくない。上手にやらないとフィニッシュの着地が生きてこない、大変難しい落語と言える。古今亭志ん生は「この噺は大変疲れる噺なので、滅多にやれないんです」と語っていた。

<文七元結（もっとい）>

腕の良い左官の長兵衛は賭け事好きが玉に瑕。家庭を顧みず、遂に年を越せない状況に追い込まれてしまい、娘のお久は自ら吉原へ出向き、身売りを申出る。女郎屋の女将はお久から事情を聞き、父親（長兵衛）を呼び出して意見した上で、「百両を貸すが、一年を限りとしてお久を女中として預かる」「一年後に百両返してくれればお久を返すが、返してくれなかったら女郎として店に出す」と出る。

年を越すことができることになった長兵衛は、借りた百両を懐に入れて家路につく。

吾妻橋まで来たところで、橋の欄干から身投げをしようとしている青年（商家の手代の文七）を目撃。

「百両の集金を済ませて店に戻る途中で掏摸（すり）にあつて大金を失ったので、身投げをして詫げる」と言う。長兵衛は青年の命を救うべく百両の金をあげてしまう。

長兵衛の家がどのような状況になってしまうのかは誰にも想像がつくが・・・

文七が失った百両は出先に忘れてきただけだったということが後に判明し、無事に手元に戻る。そして長兵衛が借りた百両は女郎屋に戻りお久は無傷で戻り・・・、文七と結ばれることになる。

文七とお久は後に麴町に元結屋（「文七元結」という店の名）を開き、幸せに暮らしました、という締めになり、「落ち」はない。

経済的に破綻状態になっている様子を長兵衛と女房のやりとりの中で描き上げ、女郎屋の女将のドスの聞いた人情を十分に示して、聞いているお客さんは窮状をがっかりと認識する。

その上で、身投げせんとしている青年と長兵衛のやりとりが、剣が峰に立つ長兵衛に究極の選択を迫る。一場面の展開毎に、徐々に聞き手を引きずり込んで行く。引きずり込まれた観客は、自分が立っている場所の目の前で起きている事件に、もう第三者では居られなくなってしまう。

この噺も、途中の流れの中の滑稽なやりとりを派手にやり過ぎて、後半が締まらなくなってしまう高座をいくつか目にしたことがある。「子別れ」同様に難しさが潜む落語のような気がする。

中国の話をもとにして三遊亭圓朝が創作したと言われている。多くの人がこのネタに取り組むが、八代目林家正蔵（彦六）の高座は完成度が高いと感じた。

今や「元結」を知らぬ人も多し、「元結」を「もっとい」と読むこともわからない人が多い時代になってしまったので、時代としては取り残されてもおかしくない噺になってしまったが、噺の展開の中には「元結」という言葉は出てこないのが問題なく語ることができるのがよい。

<芝浜>

長屋に住む魚や魚勝は、腕の良い魚やではあるが酒があまりよくない。ある朝女房に時を間違えて起こされて魚河岸に出かけたが、まだ問屋が開いていない。やむなく芝の浜で煙草を一服している時、42両入っている革の財布を拾う。

「42両もあればしばらく遊んで暮らせる」と、仲間を集めて大酒を飲んで酔って寝てしまう。

その間に女房は財布を隠してしまい、目が覚めた亭主に「財布なんかなかった、仕事から帰って何だか上機嫌で仲間と酒を飲んで寝てしまっただけだ、夢でも見たんじゃないの」と一笑に付す。

気分を入れ替えて、酒をやめて真面目に働き三年後には店を構えるまでになる。その年の大晦日、店を閉めて年越しの膳についたところで、女房は財布を出してきて事の顛末を告白する。

「あの時、あのまま金を使ってしまったら、これまでどおり気の緩みは直らず道を踏み外したに違いない。腕の良い魚やのあんたにそうならいたくないから、夢だと嘘をついたんだよ」そして「腹が立つなら私を殴るなり蹴るなりしておくれ」

女房の告白を受け入れ、礼を言ってこの場は丸く収まり年越しの膳に手を付け始める。女房に久しぶりに一杯、と酒を勧められるが。。。。。

三代目桂三木助の「芝浜」は、芝の浜の情景描写、拾った財布の中身を数える魚やらしい数え方、有頂天になって飲む場面などなど、終盤で必要となる背景の設定がどんどん出来上がっていく。そして、大晦日の晩の女房の告白の場面で頂点に達する夫婦の会話が素晴らしい。

これまで多くの人の高座を耳にし、目にしたが、三代目桂三木助の右に出る人はいないと思っている。三遊亭圓朝が、「酔っ払い・芝浜・財布」からまとめあげた三題噺と言われているが、圓朝全集には載っていないという不思議な作品らしい。

<井戸の茶碗>

子別れ・文七元結・芝浜はいずれも「酒・博打・女」で乱れた男が起こす事件がきっかけとなっている人情噺なので、教科書には載せられない噺だが、「井戸の茶碗」にはアウトローは出てこない。

善人と善人が絡み合っ捲き起こす騒動を描いており、子どもにも安心して聞かせられる。

正直者の屑屋の清兵衛が裏長屋を流していると、千代田ト斎という浪人の家から声をかけられる。

職にありつけず、日々の暮らしにも困るようになってしまった千代田ト斎は僅かな屑を出したついでに「仏像を買い取って欲しい」と懇願する。屑屋は渋々200文で受け取り、「売差が出たら半額返金」を約束して、背中の中に入れて立ち去る。

細川様の屋敷前を流していると家臣の高木作左衛門の目に止まり、仏像を300文で買いたいと言う。

買い取った高木作左衛門が仏像を洗っていると、中から50両の金子が出てきた。

「仏像は買ったが中の金子を買った覚えはないので返したい」という高木作左衛門の前に、差益100文と中から出てきた金子50両を巡って騒動が起きる。長屋の家主の仲裁で50両の金子は、「千代田ト斎と高木作左衛門で20両ずつ、屑屋の清兵衛に骨折賃10両」として解決に向かうのだが、千代田ト斎は恵んで貰ったようで気が収まらない。「ならば、何か手元にある一品を差し上げたらどうか」との取りなしを経て座右の湯飲み茶碗を高木作左衛門に贈る。

ところが、細川の屋敷に出入りする目利きがこれを見て「井戸の茶碗」という名器であることがわかり、細川の殿様が「余が所望する」と一声、300両で引き取ってしまう。

この300両を間に置いてまたまた厄介なやりとりが展開される。

そして、見事な結末となり、美しい「落ち」に入る。

我が心に逆らえぬばかりに武家社会で居場所を失った実直な浪人、細川様にお仕えする要職にありつくことができた正直潔白な若い武士、巷で小さく暮らすが正直で真面目な屑屋、この三者が絡み合う見事な展開に聞き手は引き込まれる。これでもか、これでもかと発生する善意ゆえの騒動は滑稽な場面もありはする。

滑稽な場面で必要以上に笑いを取ろうとするとつまらない噺になってしまう。「善意を表現する」に止めるのが良いのだが、その「ほど」を誤る高座を何度か見たことがあるが、二度と見たくない。

笑いながらも涙を流し、終って見ると「ホンワカ」したものが漂う、そんな快感がある一席である。

栗原東髓舎の「思出草紙」に載っている話が原型となり、講談「細川茶碗屋敷の由来」を人情噺化したもので、初代春風亭柳枝などが世に広めたそうだ。

この落語を知ったのは40年以上前になるが、ラジオでやっていた古今亭志ん朝版をカセットテープに録った。以来何度も何度も聞き返すたびに味わいが増す我が家の家宝のようなものだと思っている。

のちに古今亭志ん生版を手に入れて聴き比べてみたが、正直者同士の人情の機微・成功した武士と居場所のない武士・武士と町人、様々な角度からの人間模様が見事に描かれている志ん朝版の方が優れていると感じた。

＜一文笛＞

上方落語中興の祖と言われた人間国宝の三代目桂米朝が作った創作落語だが、古典落語の風合いを感じさせる。主人公は掏摸（すり）という面白い仕立ての落語。

角の駄菓子屋の店先、子ども達が一文笛に群がっている中で、一人ぼつんと立ってそれを眺めている貧乏な男の子がいる。この子が店先の一文笛を手にして眺めていると駄菓子屋の婆は「金のない子はあっちへ行け」と追い払う。これを見て不憫に思ったのが掏摸の秀、店先からヒョイトくすねて男の子の懐へポトンと入れてやる。

家に帰った男の子は懐から出てきた一文笛のことで親から詰問される。身に覚えのないことであることを涙ながらに弁明するが聞き入れられず、「貧乏していても人のものに手を出してはいけない、お前のような子は家にはおけない、出て行け」と追い出される。

やがて付近が静まり返ったと思ったら、男の子は井戸に身を投げてしまう。長屋の者が助け出して一命は取り留めたものの意識が戻らず寝たきりになってしまった。

良かれと思ってしたことが最悪の結果になってしまい、我が身を恥じた秀は左手を懐に入れて取り出した匕首で、掏摸の命である右手の人差し指と中指を切り落とす。

このままでは男の子の行く末が案じられると、良い医者はないかと探したが、「20 円の前金を用意しなければ入院させるわけにはいかない」とあしらわれる。

腹を立てた秀は、この医者が酒屋で一杯やっている間に、待たせてある人力車から財布を抜き取り、男の子の入院に役立てようとする。そして……

掏摸とは言えども義賊のはしぐれ、貧乏人から剥ぎ取ることはしないという設定。痛めつけられている貧乏人を何とか助けてやりたいという一心で犯罪を犯すという度肝を抜くような筋書き。そして「自分の掏摸がきっかけとなって貧しい男の子の命が失われる」という事件の発生、「金輪際掏摸はしない」という覚悟で指を切り落とすという驚愕の場面。さらに窮状を打破するためにはと、一度は止めた掏摸を再び働くことになる。

「落ち」は秀の短いセリフになるのだが、当然のことながら上方落語だから上方言葉になっている。もしこの噺を江戸落語でやったら、江戸言葉のセリフになってしまう。言葉の持つリズム・響き・雰囲気異なり、味わいもなく、つまらないものになってしまうような気がする。

主たる筋書きの部分はここに示したとおりだが、噺の始まりで「掏摸という仕事のステータス」を巧みに示しており、この場面がなければ後半の筋書きは意味を持たない。前半のこの場面さえも会場を静寂にさせて観客の目と耳を釘付けにする。

息を飲むような場面が続き、驚きと恐怖が入り交じり客席はシーンと静まり返る。そして、驚くような「落ち」で終わりになる。聴衆は長い時間硬く強ばって噺に聴き入っていたが、バサリと鎖が解かれたように体を柔らかくして会場を出る。

以上